

平成27年度胃がん検診成績

胃X線フィルム読影委員会 委員長 関 裕 史

平成27年度の新潟市胃がん検診の結果を報告する。

1. 胃がん検診の総受診者数・カバー率の推移 (表1)

カバー率は22.8%であった。平成15年以降、X線検査は減少し内視鏡検査が増加する傾向が続いていたが、本年度は内視鏡検査において前年に比べて減少がみられた。

2. 胃直接施設検診の成績

1) 施設検診の年齢層別成績 (表2、図1)

総受診者数は13,518例で、60歳以上が89.1% (12,040/13,518) である。60歳以上の比率は前年とほぼ同率だった。

X線直接検診受診者数は前年に比べ132例 (1.0%) 減少している。要内視鏡率は5.9% (802/13,518)、内視鏡受診率は86.0% (690/802) であった。前年度に比べ、要内視鏡例の内視鏡

表1 新潟市の胃がん検診総受診者数とカバー率の推移

年 度	20	21	22	23	24	25	26	27
対象者	286,456	285,439	290,042	293,658	295,581	297,830	298,732	300,561
集団検診	15,229	15,455	14,773	13,681	12,876	12,458	11,814	11,351
直接施設検診	17,808	17,362	16,704	15,525	14,744	13,687	13,386	13,518
内視鏡検診	32,883	35,383	37,554	38,644	41,306	43,274	44,281	43,581
合 計	65,920	68,200	69,031	67,850	68,926	69,419	69,481	68,450
カバー率	23.0%	23.9%	23.8%	23.1%	23.3%	23.3%	23.3%	22.8%

胃施設検診発見胃がんの推移

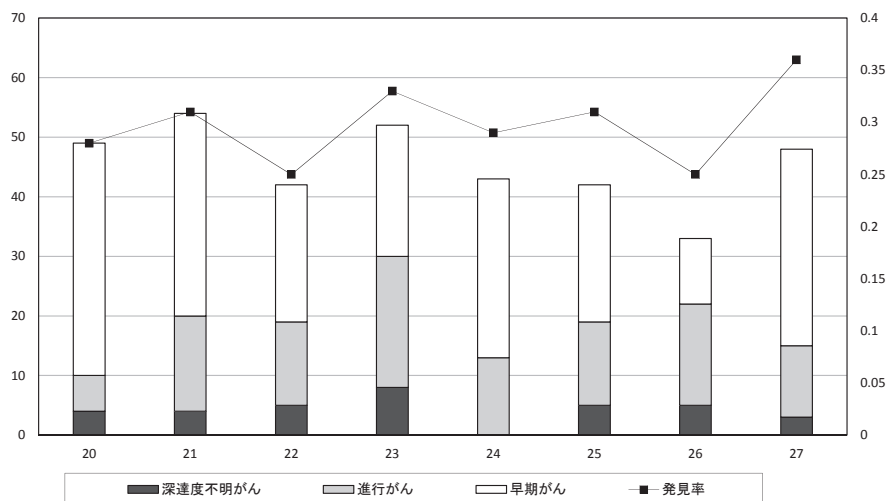


図1 胃施設検診発見胃がんの推移

表2 27年度 胃直接施設検診年齢疾患別成績

区 分	受診者数		要内視鏡数		内視鏡受診数		精 密 検 査 結 果											
							発見胃がん (D)						胃がん疑い		胃ポリープ		消化性潰瘍	
	確定胃がん			深達度不明がん														
	進行がん		早期がん		不明がん		胃がん疑い		胃ポリープ		消化性潰瘍							
男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女			
40歳	36	94	2	6	2	6										3		
45歳	30	59																
50～54歳	151	350	5	18	5	16									2	4	1(1)	1(0)
55～59歳	252	506	11	22	7	21									1	7	1(1)	1(1)
60～64歳	755	1295	57	62	46	59	3		2	3					6	12	10(7)	4(3)
65～69歳	1944	1872	129	79	101	70	1		5	2		1			18	20	7(6)	6(5)
70～74歳	1310	1295	101	63	85	58	2	1	7	3					12	13	12(10)	4(3)
75～79歳	1016	935	71	53	62	48	3		5	2					16	13	5(5)	1(0)
80～84歳	551	615	45	36	42	30	2		2	1	1				11	7	5(4)	1(0)
85歳以上	225	227	30	12	22	10			1		1				5	4	1(0)	3(2)
計	6,270	7,248	451	351	372	318	11	1	22	11	2	1			71	83	42(34)	21(14)
	13518		802		690		12		33		3		0		154		63(48)	
			B/A 5.9%		C/B 86.0%		D/A 0.36%		早期がん率 73.3%									

区 分	精 密 検 査 結 果																	
	消化性潰瘍				腺 腫		胃粘膜下腫瘍		十二指腸ポリープ		食道がん		その他の悪性腫瘍		その他		異常なし	
	十二指腸潰瘍		共存潰瘍															
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女		
40歳							1	2								1	1	
45歳																		
50～54歳		1(0)						1							2	2	7	
55～59歳		1(1)						1	2							4	10	
60～64歳	2(2)	4(4)	2(1)	1(0)			3	1	1					4	4	13	30	
65～69歳	6(6)	1(1)	3(3)	2(1)	1		6	5	1		2(1)		1	17	7	34	25	
70～74歳	1(1)	2(2)	1(1)		1		4	2	1		5(2)			10	2	29	31	
75～79歳	3(3)	2(2)	1(1)		3	1	3	3						6	4	17	22	
80～84歳	1(1)	2(0)			1	1		4			1(1)			2		16	14	
85歳以上	1(1)						3				2(0)			1		7	3	
計	14(14)	12(9)	7(6)	3(1)	6	2	21	20	3	0	10(4)		0	1	40	19	123	143
	27(24)		10(7)		8		41		3		10(4)		1		59		266	
	100(79)																	

※その他の悪性腫瘍：悪性リンパ腫 (1)
 ※深達度不明がん：拒否 (2)、問合わせ中 (1)

受診率はほとんど変わりなかった。

内視鏡による精密検査結果は、発見胃がん48例、0.36%で、早期がん33例、早期がん率73.3% (33/45) であった。本年度の胃がん発見率は例年より高率で、早期がんも多数発見された。その他は、ポリープ154例、消化性潰瘍100例、腺腫8例、粘膜下腫瘍41例、十二指腸ポリープ3例、食道癌10例、その他の悪性腫瘍1例、異常なし266例という結果であった。

2) 年齢層別の発見胃がん (表3)

50歳以上の症例を5年きぎみの年齢層別に発見胃がんを集計した。胃がん発見率は、60～64歳0.39%、65～69歳0.24%、70～74歳0.50%、75～79歳0.51%、80～84歳0.51%、85歳以上0.44%であった。発見率は70歳代、80歳代の高年齢層で高率であるが、本年度は60歳代の発見率も前年度より上昇した。

3) 初回受診者数の推移 (表4)

胃X線施設検診初回受診者数は2,711例、全受診者比は20.1%で、前年度よりやや上昇した。

3年連続受診群で高く、隔年受診群では低かった。早期がん率は、4年連続群、初回群で高かったが、特定の傾向はみられない。

4) 初回・再診別成績 (表5)

初回受診者群の胃がん発見率は0.48%で、再診者群では0.32%であった。早期がん率は、初回受診者群75.0%、再診者群72.7%で、前年度より上昇した。

6) 発見胃がんの最終検診歴と検診方法 (表7)

発見胃がん例の最終検診歴を見ると、初回群13例、1年前群30例、2年前群4例、3年前群1例であった。1年前群の最終検診方法は直接X線29例、内視鏡1例、2年前群では直接X線4例、3年前群では直接X線1例であった。

5) 受診形式と発見率 (表6)

胃がん発見率は、初回群、2年連続受診群、

表3 年齢層別発見胃がん

区分	受診者数	要内視鏡数	内視鏡受診数		発見胃がん					
					進行	早期	不明	計	発見率	早期がん率
50～54歳	501	23	21	91.3%				0	0.00%	
55～59歳	758	33	28	84.8%				0	0.00%	
60～64歳	2050	119	105	88.2%	3	5		8	0.39%	62.5%
65～69歳	3816	208	171	82.2%	1	7	1	9	0.24%	87.5%
70～74歳	2605	164	143	87.2%	3	10		13	0.50%	76.9%
75～79歳	1951	124	110	88.7%	3	7		10	0.51%	70.0%
80～84歳	1166	81	72	88.9%	2	3	1	6	0.51%	60.0%
85歳以上	452	42	32	76.2%		1	1	2	0.44%	100.0%

表4 初回受診者数の推移

	20年度	21年度	22年度	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度
受診者数	17,808	17,362	16,704	15,525	14,744	13,687	13,386	13,518
初回受診者数	5,218 29.3%	4,015 23.1%	3,555 21.3%	2,904 18.7%	2,966 20.1%	2,616 19.1%	2,552 19.1%	2,711 20.1%

表5 初回・再診別成績

	受診者数 (A)	要内視鏡 (B)	内視鏡受診者 (C)	発見胃がん			
				総数 (D)	進行	早期	深達度不明
初回	2,711	212 (B/A) 7.8%	183 (C/B) 86.3%	13 (D/A) 0.48%	3	9 75.0%	1
再診	10,807	590 (B/A) 5.5%	507 (C/B) 85.9%	35 (D/A) 0.32%	9	24 72.7%	2
合計	13,518	802 (B/A) 5.9%	690 (C/B) 86.0%	48 (D/A) 0.36%	12	33 73.3%	3

7) 偽陰性例・前年検診受診症例の検討 (表8)

久道の定義による偽陰性例、すなわち、発見胃がんのうち前年受診時に異常を指摘されなかった30例についてみると、内訳は、進行がん7例、早期がん22例、深達度不明がん1例であった。いずれも前年検診時ダブルチェックされていた。

この30例のうち17例が胃がんフィルム検討会でretrospectiveに検討された。この中で、振り返って前年度のフィルム上で病変を指摘できた症例が8例、47.1%にみられ、発見時には早期がん4例、進行がん4例であった。前年度の画

像では病変を明確には指摘できなかった症例が9例、52.9%にみられ、発見時は早期がん7例、進行がん2例であった。

8) 読影形式別成績 (表9)

シングルチェック機関の387例のうち、要内視鏡は57例、14.7%で、内視鏡受診は49例、86.0%、ダブルチェック機関の13,131例のうち、要内視鏡は745例、5.7%で、内視鏡受診は641例、86.0%であった。

シングルチェック機関では胃がん発見例はみられなかった。ダブルチェック機関では48例、

表6 受診形式と発見率

	なし (初回)		2年連続		3年連続		4年以上連続		隔年		不定期	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
進行がん	3		2		3		2			1	1	
早期がん	7	2		3	1	2	12	4				2
深達度不明がん		1	1									1
がん/受診者数	10/1203	3/1508	3/627	3/649	4/642	2/683	14/2881	4/3074	0/478	1/700	4/439	0/634
発見率	0.83%	0.20%	0.48%	0.46%	0.62%	0.29%	0.49%	0.13%	-	0.14%	0.91%	-
がん/受診者数	13/2711		6/1276		6/1325		18/5955		1/1178		4/1073	
発見率	0.48%		0.47%		0.45%		0.30%		0.08%		0.37%	
早期がん率	75.0%		60.0%		50.0%		88.9%		0.0%		66.7%	

*初回は3年以上受診歴なし

表7 発見胃がんの最終検診歴と検診方法

	なし (初回)	1年前 (26年度)			2年前 (25年度)			3年前 (24年度)		
		直接	内視鏡	間接	直接	内視鏡	間接	直接	内視鏡	間接
進行がん	3	7			2					
早期がん	9	21	1		2					
深達度不明がん	1	1						1		
計	13	30			4			1		

表8 偽陰性

	前年受診	前年検診のダブルチェック状況		前年検診の結果				症例検討会	示 現		
		ダブルチェック	シングルチェック	異常なし	有所見 精検不要	要精検	要治療		+	-	±
進行がん	7	7		6		1		6	4	1	1
早期がん	22	22		17	2	3		11	4	7	
深達度不明がん	1	1		1							
計	30	30		24	2	4		17	8	8	1

表9 読影形式別成績

	受診者数 (A)	要内視鏡数 (B)	内視鏡受診者 (C)	発 見 胃 が ん						
				総数 (D)	進 行	早 期	深達度不明 が ん	発見率 (D/A)	早期 がん率	対内視鏡受診者の 発見率 (D/C)
シングルチェック 機 関 (6)	387	57 (B/A) 14.7%	49 (C/B) 86.0%	0	0	0		0.00%		0.00%
ダブルチェック 機 関 (94)	13,131 (97.1%)	745 (B/A) 5.7%	641 (C/B) 86.0%	*4 48	12	*4 33	3	0.37%	73.3%	7.49%
計 (100機関)	13,518	802	690	48	12	33	3	0.36%	73.3%	6.96%

*至急病院に紹介したシングルチェックを含む

表10 ダブルチェック発見胃がんの内容

(シングルチェック4件を除く)

	件 数	主治医－異常なし 検討委員会－要内視鏡	両方とも 要内視鏡	主治医－要精検 検討委員会－生検不要
進行がん	12		12	
早期がん	29	4	24	1
深達度不明がん	3		3	
計	44	4	39	1

0.37%に胃がんが発見され、早期がん率は73.3%で、本年度は早期がんが多数発見された。対内視鏡受診者の発見率は、シングルチェック機関では内視鏡受診者なし、ダブルチェック機関では7.49%であった。ダブルチェック機関での発見胃がんの中には、X線検査で明らかに悪性病変が認められ、ダブルチェックを経ずに病院に紹介した症例が4例含まれている。

症例数はダブルチェック機関が圧倒的に多く97.1%を占めている。最近はダブルチェックされている症例がほとんどで、胃がん診断の向上につながるものと思われる。

9) ダブルチェック発見胃がんの内容 (表10)

主治医が異常なしと判定したがダブルチェックにより拾い上げられた胃がんが4例、9.1%(4/44)にみられ、その全てが早期がんであった。ダブルチェックの有用性が示唆される結果である。

3. まとめ

1) 胃がん検診のカバー率は22.8%で、前年よ

りやや低下した。X線検査の減少傾向に加え、これまで増加傾向にあった内視鏡検診がやや減少した。

2) 胃直接施設検診における発見胃がんは48例、0.36%、早期がん率73.3%であった。本年度は例年に比べて施設検診の胃がん発見率は高率で、早期がん率も改善した。

3) 施設検診の胃がん発見は高齢層で高率であった。60歳代の胃がん発見率も前年より上昇した。

4) 検診発見胃がんのうちretrospectiveに検診を行った17例において、振り返って前年度のフィルム上で病変を指摘できた症例が8例、47.1%、病変を明確には指摘できなかった症例が9例、52.9%にみられた。

5) 施設検診発見胃がん48例は、全てダブルチェックで拾い上げられた症例で、早期がん率は73.3%(33/45)であった。また、主治医が異常なしと判定したがダブルチェックにより発見された早期がんが4例、9.1%(4/44)にみられた。ダブルチェックの有用性が示唆される。